

氏名	くつ き よし つな 朽木 順 綱
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学位記番号	論工博第3915号
学位授与の日付	平成18年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	アルド・ファン・アイクの建築・都市思想に関する建築論的研究

論文調査委員	(主査) 教授 前田 忠直	教授 高橋 康夫	教授 高松 伸
--------	------------------	----------	---------

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、20世紀オランダの建築家、アルド・ファン・アイク（1918—1999）の断片的な資料（言葉、素描）に基づく建築・都市思想についての精緻な分析であり、建築家の思索に新たな解釈を与えるものである。その内容は1章～4章と結章からなる。

第1章では、ファン・アイクの思索の形成期（1940—50年代）における言葉の分析を通して、ファン・アイクが近代芸術に見出す方法概念「イマジネーション」の構造を解明し、この概念に基づく建築・都市の意味を明らかにした。すなわち「イマジネーション」が、人間と世界の事物との直接的な「リアリティ」を自覚する心の作用であることを示すことを通して、建築に固有の「3つのリアリティ」とされる「子供」「都市」「芸術家」の関わり合いを日常生活における創造性の回復として解明した。

第2章では、言葉と素描を読み解くことをとおして、かれの企てた建築・都市の構造を明らかにした。素描「葉一樹、住宅—都市」では、自然と建築との「峻別」と「同一視」の問題として分析し、「峻別」を経た「同一視」が「そこに暮らすものへの眼差し」において可能であることを解説した。また、素描「オッテルロー・サークル」では、2つの円からなる各領域が、それぞれ人間と建築のあり方を示す領域であることを明らかにし、その相互の関わり合いを、人間のあり方（「フォーム」）と、これに応答する建築（「カウンターフォーム」）として、解明した。最後に、素描「丘とくぼ地」では、人間そのもののあり方について、個と集合との根本的な「出会い」の構造として明らかにした。以上の3素描は、ファン・アイク自身による回顧展の会場構成において示された「子供の視線」を契機に相関することを明らかにした。

第3章では、ファン・アイクによる未開社会集落の思索をドゴン集落に関する論考を通して分析し、未開集落に成立する住まいの構造が、人間の身体との「同一視」によって成立すること、そして「同一視」の契機が制作行為であることを解き明かした。また世界の事物は「内部化」され、「心の緩和」がもたらされるという住まいの構造を明らかにした。

第4章では、「コンフィギュレーション」というかれの思索の主要概念を取り上げ、建築・都市に具現化される全体と部分との関わり合いについて、「場所の束」として解明した。また「場所」が人間の身体的経験に基づく空間概念であり、「仲介圏域」として多様な「対現象」の重層化を実現する圏域であることを指摘し、そして「コンフィギュレーション」が、このような「仲介圏域」を人間の「場所」として、「分節」とすると同時に「束」として全体化する両義的意味を担うことを解明した。また、建築・都市の「内部」の実現が、「コンフィギュレーション」に含意されることを明らかにした。

結章では、上記の各章で得られた知見を要約するものであり、ファン・アイクの思索の鍵概念の基層的意味を明らかにした。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、20世紀オランダの建築家、アルド・ファン・アイクの建築・都市思想の構造を、かれの遺した言葉の読解を通して建築論的に解明したものである。得られた成果は次のとおりである。

1. ファン・アイクが近代芸術に見出す方法概念「イマジネーション」の構造を解明し、この概念に基づく建築・都市の意味を明らかにした。すなわち「イマジネーション」が、人間と世界の事物との直接的な「リアリティ」を自覚する心の作用であることを示すことを通して、建築に固有の「3つのリアリティ」とされる「子供」「都市」「芸術家」の関わり合いを日常生活における創造性の回復として解明した。

2. ファン・アイクの3種の素描の読解を通して、建築・都市の諸相を明らかにした。すなわち、1) 自然と建築における、部分と全体との両義を示す素描、2) 鍵概念「カウンターフォーム」の素描、3) 人間の「出会い」の構造の素描である。また、取り上げられた3種の素描は、「子供」を契機として相関することを指摘した。

3. ファン・アイクの未開社会集落への言及の解説を通して、集落構造と人間身体との「同一視」が、制作行為を介した世界の事物との関わり合いであることを解明した。また世界の事物は「内部化」され、「心の緩和」がもたらされるという住まいの構造を指摘した。

4. 最後に、「コンフィギュレーション」というかれの思索の主要概念を取り上げ、建築・都市に具現化される全体と部分との関わり合いについて、「場所の束」として解明した。また「場所」が人間の身体的経験に基づく空間概念であり、「仲介圏域」として多様な「対現象」の重層化を実現する圏域であることを指摘し、そして「コンフィギュレーション」が、このような「仲介圏域」を人間の「場所」として、「分節」とすると同時に「束」として全体化する両義的意味を担うことを解明した。

以上のように、本論文は近代建築史におけるアルド・ファン・アイクの建築・都市思想を建築論的に、根底的な層において解明する研究として位置づけられ、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年10月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。